

2026年3月22日大齋節第5主日説教

エゼキエル書37章1-14節

ローマの信徒への手紙8章6-11節

ヨハネによる福音書11章1-45節

先週の20日金曜日、東京教区としての最後の教区会がありました。次の教区会は新しい教区としての教区会です。いよいよ北関東教区との合同をもって、教区の新しい歩みが始まります。そのような変化にあわせて、本日の大齋講話は、教区会などを通して、その流れを目撃されたお二人の信徒の方からお話をいただきます。また、いよいよ今年も、イエス様の復活をお祝いする時も近づきました。わたしたちの信仰の基である、イエス様の復活の意義を深く味わうために、よりよい大齋節を最後まで過ごしたいと思います。

さて、本日の福音書は、ラザロの復活の物語です。先週の生まれつき目が不自由な人のお話に並ぶくらい長いお話です。本日もこの福音書を中心に学びたいと思います。

以前の聖書日課では11章17節からとなっていました。新しい聖書日課では、1節から45節までとなりました。最後の45節は、『聖書協会共同訳聖書』の区切りでは、次の「イエスを殺す計画」(ヨハネ11:45-57)に入っています。45節までを一つのお話の区切りとしたのは、聖書日課の選択です。

さて、本日の長い箇所を一つ一つ丁寧に見ることは、時間的に困難です。それゆえ、あらすじを述べますと、イエス様の親しい知り合いともいえるラザロという人が病気で亡くなり、四日経過していたが、イエス様によって復活したということです(あまりに短くまとめすぎたかもしれません)。

このお話の目的ははっきりしています。それは、先週と同じです。最後の45節に「**マリアのところに来て、イエスのなさったことを見たユダヤ人の多くは、イエスを信じた**」とある通り、わたしたちがイエス様を信じることです。話の内容が異なっても結論が同じであるということは、ヨハネ福音書の特徴と言えます。それは、ヨハネ福音書の末尾に近くにある20章31節の「本書の目的」という個所にある、「**これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じて、イエスの名によって命を得るためである**」のとおりです。もちろん、先週の9章の時と同じように、「**神の栄光**」とは何かを知り、「**信じるようになる**」ことが大切とされているといえますが、いずれにしてもイエス様を信じるように促しているのが本日のお話です。

あらすじだけでは示されない特徴として、本日のお話も、最初から、登場人物同士の会話に誤解や行き違いがありました。決して、直接的に信じなさい、信じますとはなっていません。それは、読者には少し戸惑いを感じるような描写とも言えますが、ヨハネ福音書は、決してわかりやすい内容ではないからこそ、信じていても不安がある読者に対して、慰めを与えるのです。

イエス様と登場人物たち、弟子たち、マルタ、マリアとのやりとりは、信仰と

不安の両方を示しています。また、信じているけれども、人間的な思いによる判断が、その信仰に影響を与えていることも示しています。12節の「弟子たちは、『主よ、眠っているのであれば、助かるでしょう』と言った」は、完全な死ならば望みはないが、深く眠っている程度の病気ならばという人間的理解を示しています。もしかすると、現代人がイエス様の復活について、一種の仮死状態であったと理解しようとするのと同じ感覚が、ヨハネ福音書の時代にもあったのかもしれない。

24節の「マルタは、『終わりの日の復活の時に復活することは存じています』と言った」、この描写は、先ほどの弟子たちとは異なります。復活は信じている、しかし、信じていても今目の前にある大切な人の死をなかなか受け入れられない、そのようなマルタの気持ちを示しています。32節の「マリアはイエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足元にひれ伏して、『主よ、もしここにいてくださいましたら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに』と言った」は、イエス様のことを信じていても、今、どこにおられるのかというマリアの問いです。いつの時代においても、様々な地上の悲しみに触れたとき、神はどこにおられるのかと問うことと同じと言えます。信じていても、人間はそのような思いになるのです。

本日の福音書は、物語世界を超えて、今、この福音書を読んでいるすべての読者の気持ちを反映しているといえます。事実、福音書を読んでいるわたしたちは、イエス様を通して復活の命を信じています。信じているからこそ、大斎節の学びをするのであり、また復活日を待ち望んでいます。どれほどの信仰があっても、機械的に慰めを受けるわけではありません。不安が取り除かれることもありません。信仰があっても、不安と悲しみはすぐには無くならないのです。個人的なものであれ、紛争のような国際間の事柄であれ、今あるあらゆる不安も混乱も機械的になくなるわけではないのです。

それでは、イエス様を信じる意味とは何でしょうか。そのように考えてしまうと、また、そのような世界で信仰を持っているわたしたちに対して、本日の福音書は、35節に「イエスは涙を流された」と言葉を響かせます。この個所は、「イエス」という固有名詞があります。通常ならばお話の途中では、動詞の語尾変化だけで固有名詞は省略してもよいのですが、「イエスは」と、強調しています。イエスが涙を流したという描写も、「涙を流す」という動詞も、新約聖書ではこのみです。信仰があっても、わたしたちが悲しみの涙が出てしまうことがあるのと同じように、イエス様も、復活させる力があっても、ラザロのために、そしてわたしたちのために涙を流してくださるのです。わたしたちの信じている主は、そのような方である、そのことを本日は改めて心に刻みたいと思います。そして、その方を信じることにまことの希望があることを示す証が、イエス様の復活です。そのイエス様を信じて、これからも歩んでいきたいと思えます。そのイエス様の復活を喜ぶ備えをしたいと思えます。